事例６　ＡＤＨＤと非言語性ＬＤが疑われるＦ男（中学２年生）

欠席等の様子

小１	３日	中１	９日
小２	４日	中２	３日
小３	10日		
小４	12日		
小５	20日		
小６	15日		

学習の様子

・感想など自分の思いを書けない。
・計算は普通に出来る。
・論理的思考を要するものは苦手である。
・体格・健康面では問題はないが、運動面はほとんどの面で劣っている。
・認知において、継次処理[※10]は強いが、同時処理[※11]に相対的な弱さがある。

性格や行動の様子・エピソードなど

○　幼少期から落ち着きが無く、外出時には必ず手をつなぐなど目を離せなかった。
○　(３歳)４カ月間プレイセラピー（病院療育相談ルーム）を受け、刺激が多くなければ落ち着いて行動できた。
○　(小・低学年)トラブルが続いた。職員室で寝そべり、「～を殺したる」などと言った。
○　(小・中学年)多動抑制薬[※12]を投薬されたが変化なく、だんだん服用しなくなり中断した。
○　(小・高学年)学級児童へのちょっかいが増加し、そのことからいじめの対象となり登校しぶりになった。いじめた児童や他の児童に障害理解を指導し、いじめは止められたが、抑えが利かなくなり、暴れ出すと授業が成立しなくなった。奇行（気に入らない児童に唾をかけたり、鼻くそをつけたりすることなど)が目立った。
○　(小６　２学期)病院療育相談ルームへの通院を再開した。
○　興奮状態での発言は、ほとんど意味が解らない。言葉を常に発していることや、授業中突然奇声を発し、無関係な生徒の名前を叫んだりすることがある。気になることがあると、それ以外のことは頭に入らない。
○　人とのコミュニケーションがとりにくく、相手の欠点を指摘する言葉かけや嫌がることをして、かかわりをもとうとすることが多い。整理、後片づけ、掃除ができない。

生徒の理解

関係機関の検査結果及び情報から、Ｆ男はＡＤＨＤを含む非言語性ＬＤ[※13]と推測される。課題である情緒的な不安反応は、社会的な関係(場の意味や言葉のニュアンスなど)を認知することがうまくいかないことから不適応感が大きくなり、二次的な障害として出現していると考えられる。

援助・指導の方針

１　社会性の成熟を図るため、自己存在感を含めた自己像の再構成への援助を組織的に進める。
(1) 対人関係　①本人の不登校状態再発防止もふまえ、学校での居場所と信頼関係の形成を進める。②間違った行為には厳しく対応し、きちんと整理して本人に返す。③学級・学年の他生徒に対し理解を求める。
(2) 学習面　①ほめる機会を意図的に増やし、自信の回復を図る。②学習に対する非常に高い自己到達目標を下げさせ、達成感を体験させる。
２　保護者、特に心理的距離が近い母親の精神的な安定を図る。

援助・指導例と経過	主な担当者　学年生徒指導担当　教育相談部
○中学校入学を控えて	・小学校・中学校・関係機関合同の連絡会を実施する。 ・全教職員でＦ男の理解と方針(学年会及び教育相談部案)を確認する。 ①表面的な問題行動のみを焦点化せず、粘り強く成長を支援する。②父性と母性の両面を組織的に役割分担する。③関係機関との連携を続ける。
○トラブル続出 ＜F男に対して＞ ＜保護者に対して＞ ＜周囲生徒に対して＞	・授業中に大声を出す、物を投げる、蹴るなどの行動が目立つ。また、女子生徒へのちょっかいや暴行で怪我を負わせる。 ①間違った行為に対しては曖昧な対応をせず、どの行為が間違いだったのかを認識させる。 ②言い分を聞いた後に、振り返らせ、今後の行動を約束させる。 ③興奮状態の時は、指導の展開を急がず、まず落ち着かせる。 ④些細なことでも、よい変化を認め、ほめることを多くするよう心がける。 保護者が滅入らないように、家庭訪問や夜間懇談を定期的にもつ。保護者の養育姿勢を認め（しつけの問題だけではない)、自立に向けた取組を共通確認する。 Ｆ男の不安定さについて、「周囲が気になって自分をコントロールしにくいこと」「成長しようと努力していること」「挑発を掛けるようなかかかわり方は、Ｆ男がこれに乗り悪循環すること」などを説明し、理解を求める。
○休み時間には職員室に	・一目散に職員室に来て、様々な教師に話しかけるとともに、他生徒との会話も出来るようになる。 ①Ｆ男なりに悩んでいることをうかがわせる内容の話をするようになり、会話の内容も、内面的なものへと変化していった。 ②個別に学習課題を設定する。

変化と課題

1　変化

対人関係　行動を自己制御する場面が徐々に増え、攻撃性やトラブルを起こす頻度は減少した。友人と遊ぶこともでき始め、集団行動ができる場面が増えた。また、悩みを教師(主として担任)に相談する機会が増え、行動を改善する姿勢が強まった。

学習　分からないことを素直に表すことができるようになり、地道に取り組む姿勢が現れてきた。また、授業中に興奮状態になることが減ってきた。

家庭　Ｆ男の成長を気長に見守ろうとする姿勢が強まった。

2　課題

未だコミュニケーションにおける課題は山積しており、Ｆ男に対して細やかな理解が行われない場では、対人関係のトラブルは続出すると思われる。

考　察

関係機関との連携により、Ｆ男の行為を理解し見通しをもって取り組めたこと、Ｆ男だけでなく周囲の生徒と丁寧に関係を作っていったことが、彼にとって疎外感を受けなくともよい居場所として学校生活が送れ、彼の成長につながったと考えられる。また、しつけに対する自責感を和らげる視点に基づく援助が、保護者の安定に寄与した事例である。

Ｆ男は今　周囲の生徒の成長と、自己のそれとの差を自覚し始めている。そこから生じる不安と、自己コントロールの力を一歩ずつ身に付けていくこととの間で、気持ちが揺れている。